

としび

12 月 号

ただ信心を要とす・としる・べし

藤 場 俊 基
(金沢教区常讚寺僧侶)

おはようございます。お気づきかと思いますが、今日の題には、「ただ信心を要とす・としる・べし」と、あいだに点を入れてあります。これを思いついたきっかけは、七月のある日に、近くのお寺でお説教を頼まれまして、「ただ信心を要とす」という題をいただいた時のことです。いろいろと考えたのですが、どうも自分の中で話の筋が展開していきませんでした。あまりにも当たり前すぎて、これでもう答えになってしまっていて、これ以上なにも足すことも引くこともできなかったのです。これを言えば、あと何も言うことがない。そこから何も課題が出てこないという感じがいたしました。

これは、『歎異抄』の第一条に出てくる言葉ですが、「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし(聖典六二六頁)」とあります。これを「要とす」で切ると、それは一つの結論を述べる言葉になってしまいます。「要とすとしる」までになると、今度はこの結論に対して、私は「知るべきこと」を知った」と、結論と私との結びつきができてくる。これでも、知ってしまったということになれば、もうそれで何も必要なくなっていくわけで、ここからもあまり課題が出てきません。ところが最後に「べし」とついたときに、今度はこの言葉が私のところから離れて、自分がそれを「しるべし」と呼びかけられる立場になる。そのときに、それが教えの言葉、教言になっていくのです。

「信心を要とすとしるべし」と言われたときにはじめて、何をどのようにしるべしと言われているのかということ、自らが問われる言葉になっていくわけです。

しるべしと言われても「信心」という言葉の中身がはっきりしないまま、この言葉だけが独立したものととして語られるならば、中身を問う必要があまりなくなっていくと思います。そして私たちは、中身はわかかったものとして、それをごく当たり前のように話している。たとえばそうであったとしても、「ただ信心を要とす」ということ自体については、それを間違いだと言えないのです。間違っていないのです。私にそれを知った」ということで終わってしまう。この「知る・わかる」ということが、私たちにどうしてどういふことなのかということ、非常に重要な問題なのではないかなということがあるわけです。仏法がわかるとかわからないとか、信心とはどういふことなのか知りたいという質問に出会うことがあるのですが、この知るとか、わかるといふことは、いったいどういふことなのでしょう。

「信心」は、言うまでもなく、浄土真宗においては、非常に大事な言葉です。蓮如上人の「御文」でも繰り返し使われます。中でも、私たちが耳にする機会が多いのは、第五帖目の十一通、いわゆる「御正忌の御文」です。そこには「くちにただ称名ばかりをとなえたらば、極楽に往生すべきようにおもえり。それはおきにおほつかなき次第なり(聖典八三八頁)」とあります。ただ口に称名ばかりをとなえたらば、極楽に往生するだろうと思うことは、なんと頼りない話だということ。信心がなければ、ただ「南無阿彌陀仏」と口にしている、そのことが頼りないことだ、と。こういう蓮如上人のお言葉を通して、信心こそが大事なのだという思いが、私たちのなかに染みついています。

今、この言葉にであうのはどういう機会かといいますと、私は、学習会とか座談会などで、若い人に「信心の有無にあまりこだわらなくてもいいから、とにかくお念仏をしなさい。本気になれなかったら、練習のつもりでもいいからしなさい」ということを申しあげるので、そうすると、ときどき「そんなふざけた気持ちでお念仏するのは嫌だ」と言って反論する人がいます。そういうときに、必ずといっていいほど引き合いに出されるのが、この「御文」です。「信心がないままお念仏しても、むだだと蓮如さんがおっしゃっている。だから私は、信心がはつきりするまではお念仏はしたくはない」と。

最初、私は、その反論にどのように向き合っているのかわからず戸惑いましたが、何度か同じ経験をしますと、しだいに問題の整理がついていきました。そこで思い当たりましたのは、蓮如上人がこのような言葉を向けていた相手はどういう人だったのだろうかということ。蓮如上人の前には「信心がはつきりするまでお念仏はしたくない」と言っている青年がいたのだろうか。そういう青年に「そうだその通りだ。信心がなかったらお念仏をしてもむだだ

から、信心がはつきりするまで待ちなさい。それまでは念仏をせず、信心をはつきりさせることに全力を傾けなさい」と、こういうことを蓮如上人はおっしゃりたかったのだろうか。

私にはそれは思えません。蓮如上人が、この言葉をむけた方は、きつと一所懸命お念仏をしていた方でしょう。口を開けば「なんなんだぶ、なんなんだぶ」と。それはある意味で、自分がお念仏をしているということを自慢の種にしているような方々だったのでないか。たとえば、「今日は朝から何回お念仏をした」とか、あるいはそれを聞いて「あなたは一万回か。私はもう一万二千回お念仏しました」というようなことを言い合っているような人々が思い浮かぶのです。自分が励んだ回数を自慢し合うような人々で、自己肯定するような意識を持っていた人に向かって「何を勘違いしているのだ。ただ口先で称えていればいいというものではないんだよ。大事なことを何か忘れていないか」と、そういう意味で使われたときに、この言葉はもつとも意味があると思います。

ところが、蓮如上人の時代から五百年経ったいま、同じ言葉を、「念仏したくない」という気持ちを正当化するために、「信心がなければ念仏してもむだなのだから私はしたくない」という意味に使うようになっていく。

「御文」の中では、念仏するのに信心が伴う必要があるということが問題になっているのですけれども、問題にされているのは、自分がお念仏に励んでいることは正しいことなのだ、という意識のほうなのではないかと思うのです。ところが、そういうことと切り離されて、「信心がなければ、ただお念仏をしても意味がない」という意味の言葉として一人歩きしている。ですから、まったく違う意味の使われ方をするようなことが起こってしまっているわけ

です。教えを聞くことが大事であることは間違いないのですが、そこにも大きな問題が待ちかまえています。蓮如上人のお言葉で言えば、

「えて(得手)に聞く」ということです。自分が気に入ったように聞きたいのです。私たちは、普通、正しいことを信じていると考えているような気がしていますが、実は逆なのではないか。自分が信じたことは間違っていないかと思いたいだけなのではないか。真実だから信じるのではなくて、信じたことを真実だと思いたい。そしてそれに固執しているのが、私たちのありようなのではないか。

以前、大津のホテルに泊まった時のことですが、食堂に「鬼の寒念仏」という題がついた大津絵がかけてありました。鬼が袈裟衣を着て、鉦を首からぶら下げ、左手には奉加帳、右手に鉦を打つ槌を持っていました。頭の角は片方が折れていました。絵の余白にはくずした字が書いてありました。その下に解説が張ってあったので、そこに書かかれています。「慈悲もなく、情けもなく、念仏をとなふる人のすがたとやせん」という歌だということがわかりました。慈悲も、情けもなくせに袈裟衣を着て念仏を称えながら寄付を募っているあさましい姿だと、この鬼のことを見下げたような意味でしょう。

解説には、「鬼が衣や袈裟をまといっているが、とても慈悲ある姿とは見えない。それとは裏腹な偽善者を風刺したものである。鬼の住まいは人間の心の内にあり、仏教の教えである、三毒(貪欲・瞋恚・愚痴)いわゆる人々の我見、我執が角になって頭の上にある。自分の都合で考え、自分の目でものを見、自分にとつてほしいもの、利用できるもの、自分によりよいものと、限りなく角を生やす。大津絵の鬼は、それを折ることを教え、鬼からの救いを示唆している」と書いてありました。

絵を描いた人と、この歌を詠んだのが同じ人かどうかわかりませんが、どちらも何らかのかたちで、浄土真宗について知識がある方だと思えます。でないと、このような絵も歌もできません。この絵

や歌に表されている姿は、これはまきれもなく、私たち、袈裟衣を着た者が今現在やっていることを言い当てています。慈悲の心も情けの心もなく、角を出して、お金を集めて歩いていく姿です。「あんな人が殊勝な顔をしてお念仏しているよ」、「なんという偽善者だ」と、そう言われればひとことも言い返せません。それはたしかにそうなのですが、ではそれだけで終らせてしまってもいいのかわか。

その方たちのとらえている真宗観はどのようなものでしょうか。私は自分の理解が正しいと言うつもりはありませんが、少なくとも私の受けとめているところとはかなり違うと感じます。どこが一番違うのかと言いますと、これらの作者は、この鬼を他人の姿と見ているところなのではないかと思えます。少しでも、真宗の教えを聞き込んだ人が、この鬼の姿を見たらどのように思うのだろうかと考えますと、この歌が逆になってしまっているのではないかと気がするのです。鬼のようなこの私が念仏を称えている姿だと。もつといえ、鬼にまで念仏させる力がこの教えにはあるのだと。鬼に衣を着せ、念仏を称えさせ、寄付も集めさせる。

私は、寺に生まれたのですけれども、跡継ぎと言われることが嫌でしたし、継ぐつもりもありませんでした。なぜかと言えば、この絵や歌と同じ視点で浄土真宗というものを見ていた。そして、あんなふうになりたくないと思っていたからではないかと思えます。ですから、これらの作者の気持ちがよくわかります。でも、いまはその見方にやはり違和感をおぼえざるをえません。

もし私が、この鬼の姿を見て歌を詠むとすれば、「慈悲もなし情けもなきに 念仏を 称えせしめる 大悲とやせん」というような内容になります。こうすると他人のことはなく、鬼を自分自身の姿を詠った歌になりませんか。私のようなものに念仏させる、これこそが大悲と呼ばれるはたらきである。鬼を他人と見て、揶揄したり切り捨てる対象に見る歌だったのが、自分自身のいたみを詠

う歌になつてくるのではないかと思います。

これを紹介したのは、私たちが持っている真宗観というようものが、自分がすでに持っている価値観からできあがっているものにはすぎないのではないかと、いっしょに考えてみたからです。何かを知ったり、わかったというようなことは得手に聞いたことの結果で、それがこのような絵や歌とかたちで現れてくるわけです。これも真宗についての理解であることは否定できないのです。自分たちが真宗だと考えていることも、もしかしたら、同じようなことになつてはいないか。自分の理解とか、自分の考えていることが、はたしてどんな中身なのかということ、いつもいつも問われ、確かめ続けられていかなければならないことではないか。一つの結論を出して、その答えが間違ひなければそれでいいのだ、ということにならない。むしろ、わかったと思つた瞬間に、ぼんと落とし穴に入つて落ちていくことがある。わかったというところに待ちかまえてある危険性に気づけるかどうかということのほうがよほど重要な問題ではないかと、私は思います。

最近、金子大榮先生の本を読んでおりましたときに、印象に残る言葉にありました。「解法慢」という言葉です。天親菩薩の「十地経論」という書物のなかに出てくるのだそうですが、「わかる」とか「知る」ということの問題を教えてくださいたいのではないかなと思います。

「解法慢」とは、法がわかつたという慢心、思ひ上がりです。菩薩が道を修めていくときに、それぞれ違つた形で三度の解法慢が出てくるのだそうです。

一つは、自分で考えて自分でどうすべきかを定めることができず、だから教えなどは必要ない、という慢心です。仏教なんか聞く必要がないと、聞いたこともなく、この程度のものだと見切

つてしまふわけです。

金子先生は、個別に名前を付けておられませんが、勝手に名づけてみました。これは、いまだ聞かずしてわかつたという慢心ですから、「未聞解慢」ではどうでしょう。「不」でもいいかもしれません、やがて聞くかもしれないから、やはり「未」ですね。

この慢心は、教えにふれたときに、自分がいまままで考えていたようなことは、すでに、何百年も何千年も前から言われていた。あるいは、自分が考えてわかつたこと以上のことを、すでに言い当てられていたということであつたときに破られていく。そして、やはり教えを聞かなければならないとなつて、聞きはじめるわけです。

そうすると次に出てくるのは、聞いたらわかつたという慢心です。名づけるとすれば、聞いたらわかつた、「未聞解」の「未」がとれて、「聞解慢」ではどうでしょう。私は教法を理解した、説いてあるところがわかつた。私はその境地に入つたと、これもしばしば起こることです。

その慢心が破られるのは、教えの永遠性といいますが、普遍性によつてです。つまり、自分が知り得たことはごく一部でしかないのだということに気づかされていくわけです。これは、仏教のなかでは重要な問題でして、わかるとか、知るといふことと、自分が何を知らないのかという問題です。無明といふことで問題になる領域です。自分に見えていないところがある、ということまではわかるのですけれども、何が見えていないのかということ、誰もわからない。つまり、自分が何を知らないのか、ということを知らないのは、誰も同じです。そういうことを聞いて、この「聞解慢」もやがて必ず破られていかざるを得ない。わかつたということは、わかつたことしかわかつていない。あるいは、わかりたいようにしかわかつていないのですから。

それが破られると次にでてくるのは、教えというものは非常にすばらしい、自分の想像をはるかに絶するものである、それほどこい

のだとほめたたえる。真理というのは非常に魅力がありますから、それだけ私たちを引きつける力も強い。そこにまた、慢心が張り付いてくるのです。これは「わからぬ」ということがわかったというわかり方です。聞いてわかったことなど物の数ではない、もっとすごいものなのだ。私ごときではわからないということがわかった。それほど、法というものはすばらしいものである、と。

ちよつと聞くと、なかなかすばらしい認識のような気がします。そういうことをおっしゃる方は、私たちの周りにもたくさんおられるような気がします。しかし、これも「わかった」ということのひとつのかたちですね。だから慢が張り付く。それも慢心です。名づけるならば「解了慢」ではいかがでしょうか。

なぜそれが問題なのかというと、わかってしまったと、歩みがそこで終わってしまうからです。先に進む必要がなくなっていく。たとえば、仏法についてよく聞く言葉で「わからぬ」というのと、「わからぬもんや」というのがあります。この二つの言葉は同じことだと思いませんか。「仏法がわからぬ」というのと、「仏法というのわからぬものだ」とは。「わからぬものだ」というのは、もうわかってしまったのでしょう。さとりすまして、人に解説している。「わからぬ」というのは、わかりたいという思いがあつて、問いや課題になつていくことが現れています。「わからぬ」は、歩んでいこうとしていく人の言葉ですけれども、「わからぬもんや」は歩むことをやめた人の言葉です。この「わかった」という思いは、非常にやっつかいなものです。慢心の種になる。

「歎異抄」の最後のほうに、親鸞聖人が、法然上人のもとにおられたころの逸話がいくつか出てきます。その一つに「信心一異の諍論」といわれる、信心が同一か異なるかという論争があります(聖典六三九頁)。

親鸞聖人が、自分の信心は法然上人の信心と同じだと言ったところ、法然上人のもとでは先輩にあたる勢観房・念仏房という御同行が、「おまえのような新参者が、私たちのお師匠さんと信心が同じよなどとは思ひ上がりもはなはだしい」と叱つたのでしよう。

それに対して、親鸞聖人は「法然上人の智慧、才覚が自分と同じだというのなら、それはとんでもない心得ちがいですが、こと往生の信心においては、まったく異なることはない」と言ひはつたものですから、決着がつかなかった。最終的に法然上人のところに行つて判断を仰ぐこととなりました。そうすると、法然上人は、「親鸞の信心も、法然の信心も、如来よりたまたわりたる信心だからまったく異なることがない。私と違う信心の人は、同じ浄土に行かれませんよ」とおっしゃつたわけです。ここで「如来よりたまたわりたる信心」非常に魅力的な言葉を残してくださいました。この出来事があったために私たちは、それを金科玉条のようにして「如来よりたまたわりたる信心」という言葉を使い続けてきた。お説教でよく使われます。その言葉を使つていけば、それでいいのでしょうか。

この論争で、親鸞聖人と法然上人が同一だと言われた「信心」と、勢観房・念仏房たちが同じであるはずがないと言つた意味での「信心」とは、同じ「信心」という言葉が使われているのですが、両者が意味するところが、中身が違うというところは、はっきりしているわけです。そしてこんなに私たちには、あまり疑問もいだかずに、親鸞聖人や法然上人が「信心」という意味でこの言葉を使つていると思つていのではないのでしょうか。私たちは、親鸞聖人を祖師としていただく教団に身を置いていふのだから、「信心」とは、「如来よりたまたわりたる信心」の意味だと思つている。だから、お説教で「如来よりたまたわりたる信心」と言えるのです。

では、そのときに言われている「信心」という言葉の意味は本当に、親鸞聖人と同じような意味で使つていふことになつていふのでしょうか。もしそれが親鸞聖人と同じ意味であるならば、「私の信

心は親鸞聖人と同一である」と何のためらいもなく言えなければならぬはずです。そのように言うことに、ためらいをおぼえる人もいらつしやるのではないかと思うのです。もし、そこにためらいを覚えるのであれば、勢観房や念仏房たちの感覚に近いのではないか。あるいは座談会や談合などでは、信心が深い人だとか、あの人はまだまだ信心がわかっていないなどという言葉が使われますが、そういう使われ方をするときの「信心」という言葉の意味するところは勢観房や念仏房たちが言っている意味に、はるかに近いように思います。

法然上人の言葉で決着がついた形ですが、勢観房・念仏房は、それで自分たちが間違っていたと反省したと思いますか。「御伝鈔」を見ますと、「歎異抄」の場面から、さらにその続きがありまして「ここに、めんめんしたをまき、くちをとじてやみにけり(聖典七三〇頁)」という具合に描かれています。これは悔しいと思っっている様子ですね。「御伝鈔」ですから、ひいき目で見ているところはあつては言わないけれど、心の奥底では、やはり承服しかねるものを持ち続けておられたように見受けられます。

こういうことが私たちの周りで、どういうかたちで現れてくるかといえますと、自分には信心があるのだろうか、あるいは自分の信心はこれでいいのだろうかという「信心コンプレックス」となる。

このことは私自身の中でも問題となったことの一つです。真宗の教えにであった当初は、この教えはすばらしいという感覚を持ちながら、自分ではお念仏を口にするのが嫌な時期がありました。先ほど言いました、「信心がはつきりするまで念仏をしなくてもいいのではないか」、「信心がなければむだなのだ」というような考え方

は、私自身の経験でもあります。

やがて自分の口から「南無阿彌陀仏」と念仏が出るようになったのですが、それから、しばらくの間はコンプレックスがありました。お説教を聞きに来ている人のなかに、ほれほれするようなお念仏をされる方がいらつしやいますね。心の底からお念仏が出てくるとしか言いようがないような。そういう人を見ると「かなわないなあ」という感じがしました。それにひきかえ自分の念仏はどこか空々しいと感じたのです。自分とその人のお念仏とがどこか違う、という思いがありました。その違いは何かと考えると、その頃の私には、とどのつまり「信心」の違いになるとしか思えなかったわけです。私自身は「信心」という言葉を、そういう使い方、それは意味の理解ということになるわけですが、ずっと考えていました。

つまり、「信心」がはつきりしている人がお念仏するのと、それとはつきりしていない人のお念仏とは違いがあるのだろうか、のだろうか。違いがあるとすれば何がどのように違い、ないとすれば、あつてもなくても同じことなのかなどと、この問題を考えていました。空々しく聞こえるお念仏と、ありがたそうに聞こえるお念仏がある。このことは信心一異と、念仏一異と言ってもいいですが、同じ問題なのではないかと思えます。

私自身のなかでは、この問題については、比較的早く結論が出ました。念仏は同じだと。道理としてそうでなければならぬはずなのです。念仏が、称えた人によって本物になったり偽物になったりするというのは、どう考えてもおかしいのです。だから念仏は、誰が称えても同じでなければならぬ。この結論は、私自身のなかでかなりはつきりしました。そのことを、いろいろな機会にお話ししました。

そういうことを続けていきますと、だんだんみなさん答えを覚えてしまうようになりました。私が、「信心を喜んでいるおぼあちやんと、三、四才のお孫さんが見よう見まねでするお念仏は同じだと思

いますか、違うと思いますか」と尋ねると、最初のころは、考え込むような顔をされたのですが、何度も同じお尋ねをしていると、そのうちにみなさん、「同じだ」と応えるようになりました。学習効果といえますか、私がそれを尋ねたら、「同じだ」と言えば間違いないと、「答え」を覚えてしまわれたのです。

ところが、座談会などでじっくり話すと、「それでも、何か違わないとおかしいでしょう」という言葉が出てくるのです。「答え」は知っていても、何かわだかまりが根強く残っていて、何かそこにもうひとつ得心がいつておられない方がおられる。

そこにある問題が何なのだろうということを考えざるを得なくなりました。そこで思いついたのは、このことを、ずっとお念仏を称える人に「信心」があるかないかという問題として考えてきたことにあるのではないかということです。「信心」という言葉を、念仏を称えることに意味づけをするような意味で使っていたことが、もしかしたら間違っていたのではないかと。信心のある人となない人が、念仏をしたら意味に違いがあるかないかという問題の枠組みでは、二人の人しか考えられていないのですが、実は、そういうことを考えている私自身が、また別にいるわけです。つまり問題の枠組みに含めて考えなければならぬのは三人いるのです。二人の称名する人に対して、もう一人は聞名の人です。

私には、信心の有無やその真偽・優劣を判定する能力も資格もないくせに、称名する二人に信心の有無や真偽・優劣があると想定して、その両者が違うか同じかなどと比較していた、そういうことをしている人こそが問題にされなければならぬのではないかと。見ている側のまなざし問われていく問題なのです。信心がある人がお念仏を称えたらありがたく感じ、ない人が称えたらさほどでもない。このように、お念仏する人に勝手に条件づけをして、それによって、お念仏の価値に差が出てくるような考えになっていく。称える人に違いがあるとすると、その違いに、価値づけに差をつける。差

があるのだという目でしか見られない者の問題なのではないかと思うのです。

極端な言い方に聞こえるかもしれませんが、称える人に、信心なんかあっても、なくてもいいのです。少なくとも聞名する者には何の差し支えもない。つまり信心とは、お念仏を聞く側に立つときに必要なのではないかと。

本願の成就文にも、「あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと、乃至一念せん(聖典四四頁)」とあります。お名号を称えて信心歓喜するとは書いていないのです。その名号を聞いた者のところに喜びが生ずる、とあるのです。

私たちはいろいろな人に接するときに、その人がどういう肩書きや資格を持っているかによって、対応のしかたを変えていくというようなことをします。ときには、それが差別というかたちをもつて現れる。その人は何者であるかというその人の属性によって、こちらがその人に対する評価や態度を変えてしまうということです。それと同じようなことが、信心の有無をその人の属性であるかのように見てしまうことによって起こってくるのが、この問題なのです。

問題なのは、称えている人に何があるか、ではなくて、それを同じように聞けるかどうか。その人が持っている属性には無関係だということ、信心ということにおいて言い切れるかどうかなのです。

「信心」を、称える人の属性の一つとしてみたのが、勢観房・念仏房だったのです。だから、法然上人と親鸞聖人とが、同じであるとは思えなかった。法然上人と親鸞聖人とは、信心以外のことについてはまったく違う、けれども、そのことが往生ということにおいては、有利にもならないし、不利にもならない。なんらの差もたらさないということ、きちんとふまえておられた。そのことをは

つきりと見すえられているかどうかということが、実は信心という言葉の意味するところなのでしょう。

「ただ信心を要とす」、「信心は大事だ」と言っているだけでは、勢観房・念仏房たちが犯した過ちは避けられないと思います。むしろ、そのような理解をしようの方が普通なのだろうと思います。だから、勢観房・念仏房たちというのは、実は私たちの姿を表わしているわけです。そこに潜む問題性に気づいていくことは至難の業です。これでいいのだと思つた瞬間に、そのことにしがみついている、そこから出ようとしないうことが起こってくる。それが、わかつたということがもたらす大きな問題です。そういうものが、私たちにとって、非常に大事なことを言い当てようとしてくださっているのではないかなという気がしております。今回のご縁はここまでとしたいと思います。ありがとうございます。

(ふじば としき)

二〇〇四(平成十六)年九月二十六日

高倉会館日曜講演抄録



クローシャ//さけび

kroša

加茂川のサクラ並木から

季節外れのようなだが、そうでもない。実際にサクラの花が咲いていた。

数週間前のことである。バスの車内から加茂川の堤防を眺めていた。一人の学生さんがサクラの木をデジタルカメラで撮影している。秋だから、満開の花は、そこにはない。——にもかかわらず、学生はサクラを撮影している。なぜだろう……。

すぐに謎は解けた。ちゃんとサクラの花を撮影していたのである。よく見ると、小さな花をつけている枝がある。わずかに咲いているサクラの花を学生は撮影していたのだ。しかし、この時期、花が咲いていること自体、珍しいことだ。なぜだろう……。

おそらく猛暑や度重なる台風などの異常気象が影響しているのだろう。サクラの葉は例年よりも早い時期に枯れ落ちた。十月に入っても気温の高い状態が続いた。サクラの木も春と勘違いして、花を咲かせたのだろう。

秋にサクラが咲くということは、自然の現象としては(わずかなこととはいえ)やはり異常なことである。このようなことが毎年のように続くと問題である。

それはサクラを眺める側の問題でもある。異常気象が人間による環境破壊の結果であることは、当たり前のことかも知れないが、しばしば忘れがちになる。そのことを秋のサクラから再確認した。

一方、自然は異常気象に対して臨機応変に対応しているようにも思える。葉が枯れ落ちると、季節に関係なく、芽吹きはじめる。外界の動きに対して、ある一定の周期を維持している。不思議なことであるが、遠くから眺める風景は何ら変わることがない。

(教学研究所属託研究員 藤井祐介)